公共空間におけるサウンドアートの調査的研究

指導教員:　　大嶋拓也助教

◎背景

ここ10年の動向

・サウンドアートについての特集が雑誌に取り上げられている。

・サウンドアートの展覧会や、公共空間における音に関する展示物が増加している。

↓

注目されつつある

◎背景

しかし、

・多種多様な表現方法

・研究が少ない

・近年、認知が進んだ分野

↓

サウンドアートの定義が明確でない

↓

サウンドアート・・・主として音を媒体としたアート

◎研究目的

公共空間における作品

・誰でも鑑賞できる

・恒久的作品

・作品に場所性が盛り込まれうる

↓

建築的に関わりが強い

公共空間におけるサウンドアートについて
網羅的な調査・研究を行う

◎研究概要

まだどのような文献があるかわからない

・サウンドアートに関係しうる文献を集める。

どのような実例があるのかわからない

・公共空間におけるサウンドアートを現地調査する。

・作品の建築施主にアンケート調査を行う。

◎研究結果〈文献調査〉

新潟大学付属図書館、新潟県立図書館、ICC図書館、新刊書店、古書店、インターネット検索、新聞記事検索(聞蔵Ⅱ)を活用

↓

１２１件の文献を集めた。

(うち書籍１９冊　雑誌記事８９件　論文５件　新聞記事８件)

文献の整理分類(一部)

書名	論文名	分類	著者	出版社	年・号	ページ
サウンドエデュケーション		書籍	鳥越けい子	春秋社	1992年4月初　2003年3月	
サウンド・スケープ		書籍	鳥越けい子	鹿島出版会	1997年3月初	
世界の調律		書籍	R・マリー・シェーファー	平凡社	1986年12月初　2000年4月	
サウンディングスペース		書籍	杉本孝	NTT出版	2003年7月1日	
音の風景とは何か		書籍	山岸美穂	日本放送出版協会	1999年	
美術手帖	空間・場所・環境(サウンド=アートの境界画定)	雑誌記事	佐々木敦	美術出版社	2003年5月号	195～201
美術手帖	振動する「世界」(サウンドアートの境界画定)	雑誌記事	佐々木敦	美術出版社	2003年6月号	153～160
美術手帖	「小文字」の「聴取」に向かって(サウンド=アートの境界画定)	雑誌記事	佐々木敦	美術出版社	2003年7月号	153～160
美術手帖	カールステン・ニコライ	雑誌記事		美術出版社	2002年6月号	60～64
労働の科学	サウンド・アート音というメディア展より	論文	福田真実	労働科学研究所出版部	2000年5月1日	30、31
情報処理学会理学会研究報告	視聴覚連鎖作用と気泡を用いたインタラクティブサウンドアート	論文	松村誠一郎　鈴木太郎　荒川忠一　伊藤隆道	情報処理学会	2001年	33～38
学術講演梗概集．F－1、都市計画、建築経済・住宅問題	パブリックアート作品設置における住民参加方法についての実践的研究：愛知県岩倉市『音のアート』のケース(パブリックアート)	論文	上本裕保　堀越哲美	社会法人日本建築学会	1905年6月20日	739,740

◎研究結果〈現地調査〉

文献やインターネットなどで調べた結果、20作品の所在が判明し、そのうち17作品の現地を調査した。

現地調査済作品の概要・調査結果(一部)

作品名	作者	年月	住所	作品概要	現地調査コメント	写真
土の音	渡辺泰幸	2003年	新潟県十日町市土市　観泉院近く	小高い丘の上にあるレンガ張りの円いステージには、「音具」という粘土でできた楽器が並び、訪れる人が自由に音を鳴らすことができる。個性豊な図柄や形をしている音具は、作家と住民によって制作された。	小さな山を登り、頂上までたどり着くと作品がある。そこにはバチがおいてあり、それを手にして円形の楽器を鳴らす。球体の楽器は転がして音を鳴らす。	
キョロロのTin-Kin-Pin-音の泉	庄野泰子	2003年	新潟県十日町市松之山松口712-2 キョロロ内	タワーの地下に設置した貯水井戸に滴下する湧水が水音を奏でる。季節や天気によって変化する湧水の量により、聞こえてくる音が変化する。また、発音体によりタワー内部へと音の波が伝わり、場所によって違う音が体感できる。	作品は、森の学校「キョロロ」の中にある。円形の金属から水が滴り落ち、水中の金属面に当たり音が鳴る。湧水の量により変化するため、冬は静かで夏は涼しげな音に包まれていた。	
ドロップシリーズ01	庄野泰子	1999年12月	新潟県長岡市宮本東方町「国営越後丘陵公園」内	空中に設置されたいくつものテラコッタの先端からしみ出す水滴。その水滴は風に吹かれながら、渦巻き状の金属製のオブジェの様々な場所に当たって発音する。当たる（当たらないことも含めて）タイミングや組み合わせは、吹いている風が決定する。風が音の決定者、つまり即興の奏者なのである。 オブジェの間は通路になっていて、その中に入り込むと立体的に音に取り囲まれ、音から、風が刻一刻と移り変わっていくのを感じ取ることができる。	国営越後丘陵公園内にあるこの作品は、現在テラコッタが壊れてしまい、作品を聞くことはできない。テラコッタが特殊なためいつ修復されるかも未定である。	
Wave Wave Wave	庄野泰子	2004年4月	福島県いわき市小名浜2号埠頭	「海のWave」と「音のWave」と「身体のWave」が交差する場 海に突き出た埠頭の先端部に設置された幅6～8m、長さ76mの網状の巨大なベンチで、その真下は海。その様々なうねりとふくらみを持った形状の上に、腰掛けたり、寄り掛かったり、寝転んだり・・・身体的にどう関わるかによって、音は様々な方向からやってきて、体を包み込む。夜は内部からのライトアップによって、そのうねりやふくらみの形状が、柔らかい陰影を生み出している。	福島アクアマリンの真横の海岸沿いを歩いていると小さい丘のようなWave Wave Waveがある。腰をかけたり横になり真下の海の音を身体全体で聞くことができる。	
岩倉の耳	藤本由紀夫	1997年	愛知県岩倉市シンボルロード	椅子に腰掛けて両側のパイプに耳を当てると、リズムのある車の音とパイプ自体の振動音とで不思議な聴覚体験ができ、目の前に広がる緑は視覚的にも面白い効果を与えてくれる。	椅子に腰をかけパイプに耳を当ててみても聞いてみても、不思議な感じがしなかったので、近隣の女性に聞いたところ、「パイプが振動して音の違いを体験できる作品であるため、交通量が多いときの方が良い」とのことだった。	

◎研究結果〈アンケート調査〉

建築施主が判明した9件に、設置理由・メンテナンス・作品についての感想などを問うアンケート依頼書を郵送した。

↓

６作品についての回答を得た。

アンケート調査結果

:隣接した施設と併せて作品を設置した
:メンテナンスを行っている、または必要ない

	Umi-tsukushi	Wave Wave Wave	ドロップシリーズ＃3	風のモニュメント	音の柱	風のベンチ（電話回答）
住所	福島県いわき市小名浜字辰巳町38番地の1		埼玉県北埼玉郡騎西町大字騎西36番地1	群馬県藤岡市中栗須327番地	島根県出雲市駅南町1丁目5番地	大分県中津市豊田町14番地の3
設置理由	小名浜港における海洋環境の魅力や海に関する摂理を、視覚だけでなく、聴覚を通じて感受することにより、アクアマリンパークで得られる環境体験をより豊かなものにするため。 また、隣接する「アクアマリンふくしま(水族館)」で“福島の海”に関する知識を得た利用者が、実際の海を目の前にして、海洋環境の恩恵やアメニティの豊かさを体験することもできるため。		隣接する埼玉県環境科学センターの建設に伴い、環境をテーマにした街の公園「種足ふれあいの森」を併せて整備した。環境をテーマ・コンセプトとしているため、色々な環境(音・光)をテーマとした作品を考えていた。この作品は音を楽しむことができるほか、夜にはライトアップされ光のオブジェにもなる。	ふじの里づくりの中核施設となる「ふじの咲く丘」が整備され、その公園内のイベント広場北側の丘陵部に、展望機能を有する「風の広場」ゾーンが設けられています。 ゾーン内には「風のモニュメント」として風笛をイメージしたステンレス製の共鳴柱を配しています。 丘の上を吹く風が奏でるやさしい音色から、この地の歴史及び自然を感じることができます。	人が集まるところに、安らぎと憩いの空間を創出し、提供する。	中津市役所が管理しているため、担当の方に電話で作品について伺ったところ、「 詳細については槙設計にすべて委託して作り、また、10年以上も前だったためそのときの担当職員は異動でいなくなってしまったため、詳しいことはよくわからない。作品は電気制御されているため、メンテナンスの予算が年300～400万円かかり現在は作動を停止している。」との回答を得た。
	桟橋下部の波の音を、音響的な装置で効果的に聞いて音を楽しむ。ホーンに耳を寄せながら、集中して音を聴くことができる。	桟橋下部の波の音を、直接耳で聞いて音を楽しむ。寄りかかったり、座ったりしながらリラックスした状態で音を聴くことができる。				
メンテナンスについて	「うみつくし」は音を聴くだけでなく、波の音の強弱にあわせてライトアップする仕組みになっているため、集音器や照明器具の点検などを定期的に実施しています。具体的には、照明の点灯確認や集音マイクの感度確認を実施しています。		基本的にメンテナンスフリー。ガラス面の清掃など。	風を受けて共鳴柱によって音を奏でる仕組みのため、特別なメンテナンスは必要ありません。	細かいゴミで水滴の出口を目詰まりさせる。一週間に一度のメンテナンスが必要。メーカーのメンテナンスは行っていません。	

◎〈考察〉一般への認知について

- 5作品について近隣施設従業員などにインタビュー
  →3件「作品をみたことがない」
- 雑誌記事89件
  →すべて専門雑誌

↓

専門的な分野では注目

↕

一般には，ほぼ未認知

現地調査インタビュー(一部)

作品名	回答者	回答内容
Wind Notation	ラフレさいたま従業員	音が出るのですか？聞いたことがありません。
岩倉の耳(住民参加型)	近隣住民	この作品のパイプは振動して不思議な聴覚体験ができるから、もっと交通量が多いときじゃないと違いはわからないよ。まあ、もう10年以上も経つから壊れているかもね。

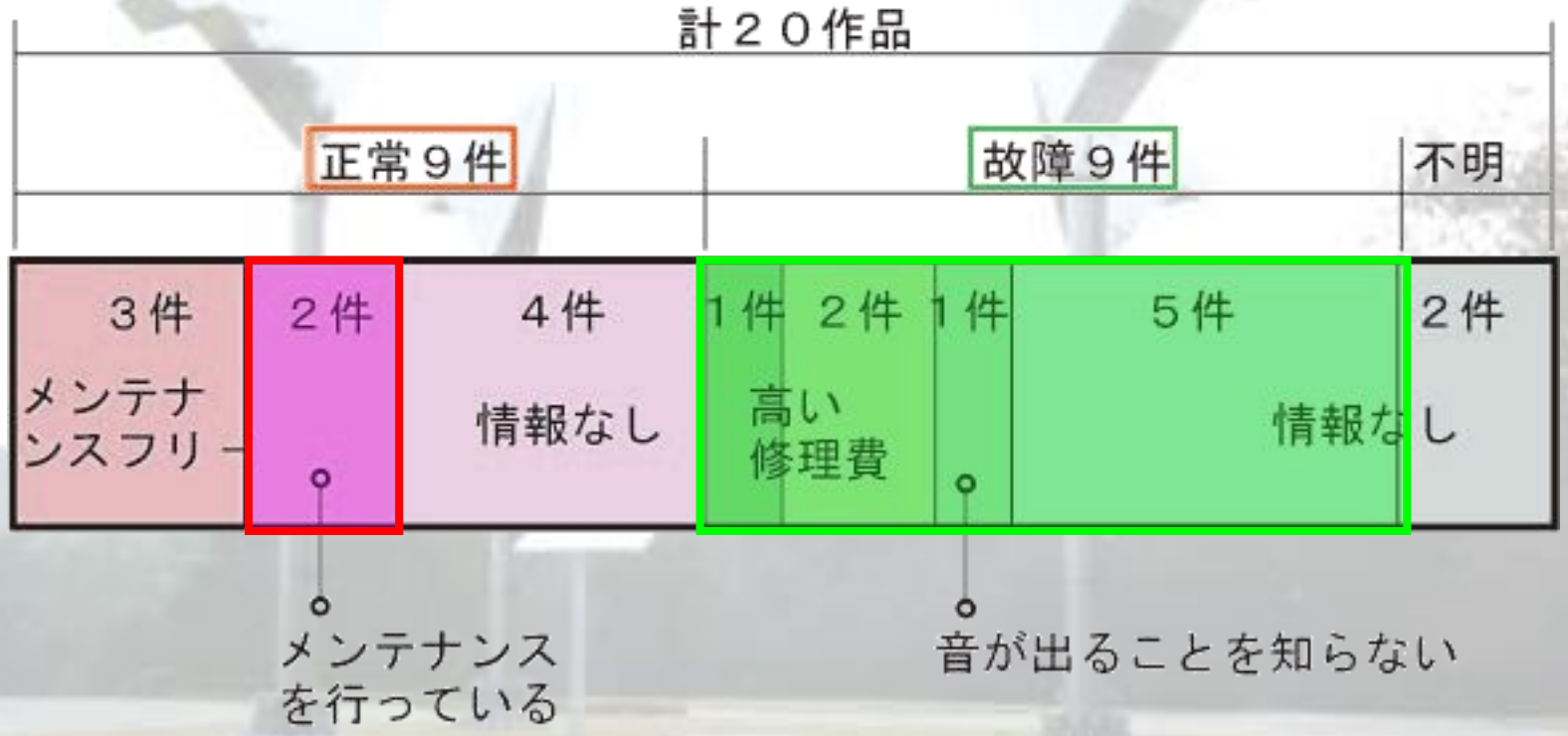
↓

住民参加型の作品制作

↓

一般への認知が向上

◎〈考察〉作品のメンテナンス状況



・音を出す仕組みが複雑になり壊れやすい。
・メンテナンスを行う必要がある。
・作品計画時からメンテナンスを考慮する必要がある。

◎〈考察〉作品意図

作品概要(一部)		
作品名	作者	作品概要
音の交線	山口良臣	街が都市化されていくにつれて、地下に封じ込められてしまうものがある。音の交線は覆われてしまう水路に流れる水の音を取り出して、岩倉の歴史を掘り起こすとともに、地下(=未知の世界)への興味を抱かせる作品でる。

アンケート調査結果(設置理由・一部)	
作品名	回答内容
Wave Wave Wave Umi-Tsukushi	アクアマリンパークで得られる環境体験をより豊かにするため作品下の波の音を聴く。

↓

17作品中14作品

地域環境や土地の歴史を知る契機を与えることを意図するため、場所性が盛り込まれていた。

◎〈考察〉作品意図

作品リスト(作品概要・一部)	
作品名	作品概要
Water Screen	水によってスクリーンを作り出し、激しい水音に包まれる。水が止まった瞬間にスクリーンがなくなり、静寂になり、その先には山並みと田園を望むことができる。

↓

全作品に共通

視覚・聴覚に対する共感覚的な訴求意図

◎まとめ

文献調査、現地調査、アンケート調査の結果から

公共空間におけるサウンドアートの多くは、土地の歴史・風土を複合感覚的に喚起させることを狙っている。

↔

恒久的に作品を維持管理するのは困難なうえ、一般にあまり認知されていない。

↓

課題

・一般への認知の向上
・メンテナンスの必要性
・綿密な作品制作